

佳作

本当のかっこ良れ

長野県 中野市立高丘小学校六年 市村 香織

夏休み、平日の朝、塾の夏期講習へ向かう車の中、私は母の運転する車の助手席に座って、ただただボケーッと前を走る軽トラックを見ていた。交差点の信号が赤になったので前の軽トラックは停車し、母もブレーキを踏んで、私たちの車も停車した。すると、私はびっくりする光景を目にした。なんと、前の軽トラックの運転席から、中年の男性が降りてきたのだ。そして、道路の安全を確認しながら、その男性と私が乗っている車の間の、中央の白線上に落ちていたゴミの袋を拾い上げ、軽トラックの荷台に乗せたのだ。その男性が落としたゴミ袋ではないのに、わざわざ車から降りて、しかも走行中に風でまわらないように、軽トラックの荷台のシートの中にきちんとしまったのだ。私は助手席から、この一部始終を母と一緒に静かに見ていた。

男性は再び軽トラックの運転席へ戻り、信号が青

になると、何事もなかったかのように発車した。私も母もお互いに一瞬目を合わせたのが、後ろに車も続いていたので、発車した。すると母が私に話しかけてきた。

「あのおじさん、かっこ良かったね。」

「うん。」

私はそう答えた。母と同じ気持ちだった。でも同時に、ちょっともやもやとはずかしい気持ちもわき上がった。

「私たちはゴミ袋があることは気付いていたけど……。」

平日の朝の忙しい時間帯、道路にはたくさん車が走っていた。お仕事へ向かう人、私のように塾や学校に送ってもらう人、いろんな事情の人たちが車に乗っていたと思う。あの男性の軽トラックの荷台にはシートがかかっていたけど、シートのすき間から赤と白の線が入った三角コーンが見えたので、おそらくお仕事で工事の現場へ向かっていたように思う。男性はとても冷静だった。

人はよく、きれいな物、目立つことの方に注目してしまい、それがかっこ良く見えてしまいがちだ。きれいではない物、目立たないことは見ないふりや気付かない。でも、この光景を本当に間近で目の当たりにして、「本当のかっこ良き」を知った。

「あのおじさん、かっこ良い。私もおじさんのように、物事を冷静に判断し、自然と体が動くような人になりたい。」

小学校六年生の夏休み、このとてもすばらしい光景に、私は感動した。